

平成 30 年度高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業

地域防災リーダー養成講座・基礎編

■日時：平成 30 年 6 月 30 日（土）13：30～16：30

■場所：高浜市役所高浜エコハウス

■参加者数：33 名

■実施内容

1. 挨拶／高浜市都市政策部 部長 杉浦義人

6 月 18 日大阪北部地震、4 月にも高浜市で震度 4 の地震が記憶に新しい。昨年 12 月に今後 30 年以内に南海トラフ巨大地震が発生する確率が 70～80%に引き上げられ、いつ来るのか分からない恐怖が募る。高浜市では平成 27 年度より、災害時の状況を適切に把握し行動することができ、平常時には地域の中で防災・減災対策ができる人材の育成を目的としてこの講座を実施している。地域の課題を見出し、共有して防災の認識を深めていただきたい。



2. 講演／レスキューストックヤード代表理事 栗田暢之

6 月 18 日の大阪北部地震については、発災当初と状況が変化している。2016 年熊本地震のように家屋の倒壊が目立つというよりは、家が傷んだというイメージ。今回の地震ではブロック塀の下敷きが悲劇だった。阪神淡路大震災以来、家具固定やブロック塀の危険性など啓発活動をしてきたが、伝わっていなかったのではないかと責任を感じている。今回の災害から得られる教訓は、3 つ。1 つ目はブロック塀。登下校の見守りをしていた 80 代男性が被害に遭い、その様子を登校中の子どもたちが目撃している。子ども達の心



の傷が心配される。高浜市は大阪北部地震後、ブロック塀の緊急点検を実施している。

一方で、タンスの下敷きになった高槻市 80 代女性は震災前に病死していたことが、後日判明した。これは、都市部のコミュニティの希薄化が読み取れる。また今回の地震では雨漏りも多く、依頼件数の増加により業者がすぐに修繕できないため屋根のブルーシートを張りが必要だが、シートが配布されても張れない人が多い。シートを屋根に張る専門業者がいない故に、悪徳業者が入って問題となるケースも出てきた。直接張って回る支援から、ブルーシート張りが出来る人材育成のための講座を行い、できる人を増やす方針に変更して対応している。2つ目はライフラインと交通機関の麻痺。都市ガスは復旧の操作を個人で行う必要がある。隣近所で操作方法を教え合う関係作りが平常時から必要だ。3つ目は帰宅困難者の続出。18日朝の通勤ラッシュ時に地震が発生したことにより、出勤できない、あるいは出勤しても帰宅困難といった事態となった。企業の多くは社員の出勤に関し、2011年東日本大震災の教訓からマニュアル作りをしていたものが活きた。熊本地震では逮捕者が出たSNSによるデマは、今回の地震でも問題となっている。情報の虚実については確認作業が必要である。

大阪北部地震の発生経緯は未だ不明。活断層のズレと考えられている。高浜にも活断層があり、ずれる可能性はほぼ0%だが、大阪府では約2%で発生した。南海トラフ巨大地震は確実に発生するといわれ、40年あれば発生するとされている。以内ということは明日来るかもしれない。高浜市の地形は外部支援が入りにくく、自分たちで備えておかなければならない。災害時の協定を多治見市と瑞浪市と締結している。協定している市へ住民の受け入れ態勢が整えられるなら、対策しておくことが必要。一時的に避難するという対策もある。2016年熊本地震でも福岡県に一時避難するという対策が取られたが、避難する人は少なかった。高浜市は南海トラフ巨大地震の想定は震度7。地震速報は日本が世界に誇る技術であり、速報から揺れるまでの数十秒間で何をするのか、すぐに行動できる姿勢が必要である。

津波については、映像をもとに解説。高浜市は、3.2m津波、小さなキリンくらいの高さが75分で到達予定。避難は可能だが、倒れてきた家具に挟まれたり、深夜に飛び起きて逃げられるか等、発災の時間帯や場所によって避難行動を考えなければならない。

愛知県が実施した防災(地震)意識調査では、関心があっても行動に移していない人が多い。県内の自主防災組織の組織率は90%以上であるが、自主防災組織の存在の有無を知らない人が6割という結果は、知

らない人をどうするかだ。まずは自分が助かるための対策を取る。自宅の耐震補強できるなら、今のうちからやっておくべき。阪神淡路大震災のとき、住民によって救助された人は救助隊に救助された人よりずっと多かった。災害時すぐに助けられるのはご近所さんしかいない。バール、のこぎり、ジャッキが使われることが多い。冊子『被災者が一番伝えたいこと』から、ダウン症の子を持つ母親が毎年避難訓練に親子で参加し、東日本大震災の時には子どもが一人で約束通りの避難場所へ避難していた。地域につながっていた成果がでた事例といえる。

一方で、東日本大震災の時は約 250 名の消防職員が、住民に避難を説得中に亡くなっている。避難を選択しない住民に対し、どのように対応するのか、消防団の救助指針も変更する必要がある。

3. ワークショップ：平常時にできること 発表・まとめ/R S Y 代表理事 栗田暢之 (高浜グループ)

- ・非常持ち出し袋はあるが、何を入れておけばいいのか分からない。家族一人に一つは準備する必要がある。
- ・通帳は携帯で写真を撮り、保存しておく。
- ・家具固定は冷蔵庫や電子レンジ、テレビが出来ていない。耐震マットで対応できそう。
- ・災害時、子ども達が学校にいるときに、親は無理して引き取りに行かなくてもいいのでは。
- ・携帯電話は普段メールより SNS を利用することが多く、メールが苦手な人もいる。
- ・高浜中学校も避難所に指定してほしい。
- ・自宅は高台のため、外へ避難するほうが危ない。自宅で籠城するための備えが必要。

(吉浜グループ)

- ・非常持ち出し袋・リュックサックで代用できるが、実際にまとめて準備できている人は少ない。
- ・懐中電灯は揃えているが、スリッパはまだ。
- ・耐震性診断と工事が必要なのは分かるが、お金をかけられない人もいる。早めに逃げる必要がある。
- ・高浜市防災ラジオを持っているが、実際に使ってみると聞こえないことが多い。

(高取グループ)

- ・食器棚にもガラスの保護フィルムを張る対策が必要。
- ・安否確認の連絡はとりあえずメールしておけばいい。
- ・高取小学校は川の堤防より低い。翼小学校など高い所へ避難したほうがいい。

(港グループ)

- ・災害時 LINE は有効なのか。SNS が連絡手段だと、普段ガラケーの人との連絡手段が心配。
- ・学区に住むポルトガル人や中国人のためにも外国語版チェックシートが必要。
- ・学区のブロック塀が控え壁をしてあっても、古くて危険。チェックシートに通学路のブロック塀の危険箇所をチェックする項目が必要。
- ・非常用の飲料水は普段飲んでみるなどして、置き場所を把握しておく必要がある。
- ・町内会への加入も防災対策につながる。
- ・子ども達の引き取りも重要だが、高齢者のデイサービス通所時の引き取りや安否確認の対策も必要。
(翼グループ)



- ・寝室のドアは開けておく習慣が必要。
- ・家具固定の必要性は繰り返し PR する必要がある。
- ・高浜市防災ラジオは必要か。発災時、市役所はどのように情報発信するのか。
(栗田)

全体的にチェックシートの項目について、「なぜ必要なのか」分からない参加者が多いようだ。必要性について解説する時間が今後必要かもしれない。

4. 修了証の授与



平成 30 年度高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業 防災リーダー養成講座・避難所編 報告書

■日時：7月14日（土）13：30～16：30

■場所：吉浜公民館ホール 2 階

■参加者数：31 名

■実施内容

1. 開会挨拶／高浜市長・吉岡初浩

先日の豪雨では岡山・広島県で大きな被害が出た。高浜市から保健師を派遣しており、情報収集をしている。高浜市職員の半分は市外から出勤しており、災害時には自分の家族も心配の中で対応することになる。住民の皆さんの現場に即した対応・協力は不可欠。今日は、災害時に役立つ術を



学んでいただきたい。

2. 講演「避難所運営のポイント」／レスキューストックヤード・常務理事 浦野愛

先日発生した平成 30 年 7 月豪雨で多くの尊い命が失われた。岡山県倉敷市真備地区の避難所の環境改善に携わった。避難所は小学校が多く、1 校に約 300 名が避難しているが、避難所の数が足りず、近隣の市町へ移る人たちもいた。日に日に暑さが増し、衛生環境の維持が難しくなっている。

震災関連死とは建物の倒壊などの直接的な被害ではなく、長期化する避難所生活の影響から体調を崩し亡くなること。阪神淡路大震災を機に初めて使われた言葉。熊本地震でも注目された。循環

器系疾患や呼吸器系疾患に集中し、自殺やアナフィラキシーショックも含まれる。障害や持病のある人達から影響が出る。周囲の目配りと早期受診を勧めることで災害関連死は防ぐことが出来る。この周囲の目になれるのは、皆さんの様な地域住民やボランティアなど身近な存在。医者等の専門職は明らかに体調が悪くなった人たちにのみ目が行きがち。悪化する前に食い止める必要がある。避難所生活で命と尊厳と健康が維持され、活力を失わないために必要な要素は何だろう。震災関連死は災害発生から 2 週間が境目だと過去の災害現場から感じている。この期間に周囲の目となり、専門家へつなげられる存在が不可欠。例えば、避難所内の土足禁止の徹底等、知っていれば出来る知識と技術を身に付けてほしい。身近にある道具を使った環境の整え方を知り、相談先などつなぎ先を学ぶ必要がある。

活力を失わないための要素とは、トイレ・寝床・食事・衛生環境が整っていること。具体的には 1 人分のスペースや通路の確保、居住スペースの土足禁止などがある。ブルーシートや段ボールなどを活用すれば難しくない。普段から災害時に活用できるものを把握しておく。パーティションは震災発生から約 1 ヶ月で配布されるが直後にはあるもので工夫が必要。

例えば寝床を整えることでリュウマチを患う 100 歳の女性は自分でトイレに行くことが出来、尊厳が守れた。

他にもトイレに関してはスリッパの設置で、トイレの汚れを外部に出さない対策ができ、断水時の対応として汚物であふれる前にルール化を図ることが出来る。

食事に関しては食事スペースを確保しないと寝床で食事をする事になり、万年床になってしまう。寝床との分離は生活リズムを作るきっかけにもなる。交流スペースも兼ねることが出来るため、避難者同士の見守りにもなる。また簡易調理スペースを作れば何人かで持ち寄って住民で炊き出しが出来る。過去の被災地では学校の家庭科室を開放していた。食中毒防止や消火器を置くなどのリスク対策が必要だが、暮らしの感覚を失わないために出来ることの一つ。

ゴミの分別に関しては1種類のみだと分別するのは難しい。誰かが後で分別しなければならない。また、特に女性への配慮として、専用の物干場や着替えなどが出来る多目的スペースも必要。物資の仕分けに関しては、ボランティアに依頼する事も選択肢のひとつ。避難所運営全般をその場にいる住民でやるには負担が大きい。あくまでも避難



所は普通の生活に戻るまでの中継地点に過ぎない。震災発生 1~2 週間は避難所内での合意形成をしつつ、役割分担しながら環境を整えて

いくことが出来るといい。

3. 質疑応答 (1 回目)

質問①: 体育館などでの暑さ対策で出来る事は?

→災害救助法で外付けクーラーを購入することが可能。時間がかかるため、扇風機と一緒に凍らせたペットボトルを浸した桶を置くことで冷風を送れるように工夫する事も出来る。虫対策で網戸の代わりに蚊帳を使っていた。

質問②: 震災で家族を亡くした子どもなどの対応は?



→震災直後は周囲でサポートする必要がある。時間が経てば、教育委員会や児童相談所などの支援につなぐことが出来る。寝不足や言動に異変を感じる場合はすぐ保健師など専門家に相談する必要がある。保健師など専門家が入るタイミングは災害規模によるが早くて翌日。行政職員は開設当初から入るため、まず相談できる。

質問③: 南海トラフ巨大地震が発生した場合は、救助や救援物資はいつ頃来るのか?

→東日本大震災では救援物資が来るまでに 1 か月かかった地域もあった。それまでは SNS 等で発信しながら物をかき集め、しのいでいた。

4. 演習「やってみよう! 避難所運営のはじめの一步」/RSY 浦野愛・岡田雅美

2 つのグループに分かれ、「身近にあるものを使った寝床づくり」と「感染症対策のための汚物処理方法」を交互に演習。

・寝床づくり/浦野担当

5 項目 (通路の確保・衛生環境の整備・寝床づくり・多目的スペースの設置・要配慮者スペースの設置) と、レイアウトや 1 日のルールを話し合った。



通路の確保はビニールひもと養生テープを活用。段ボールを活用したベッドや靴箱、ゴミ箱、多目的スペースを設置後、場所の用途に合わせた案内表示を作成・掲示した。次のグループでは前のグループが設置したものを見学して、パーテーションを加えるなどレイアウトの変更やゴミ箱の場所など使いやすさの再検討が行われた。

・汚物処理方法／岡田担当

便や嘔吐物が付着した床や衣類、トイレ等モノへの消毒とおもちゃ等直接手で触れる部分への消毒の 2 種類の方法を紹介。処理後のエプロンや手



袋に極力触れない外し方の手順や処分方法も話し合った。

5. 振り返り・質疑応答（2回目）／RSY 浦野愛

演習の中で一つでも出来る工夫が見つかった受講者が多かった。その場に居合わせたメンバーで知恵を出し合うことで避難所の環境改善につながっていく。

質問④：レイアウトの変更のタイミングは？

→なるべく人が入る前に区画整理を最低限しておくことが重要。2週間経過すると、住民同士の合意形成が出来てくるため、意見を出し合ってレイ

アウトを変更することも出来ると思われる。提案して変更できる可能性があるのは 2 週間が目安。

避難所開設当初、必ずしも行政職員が来られるとは限らない。今回の演習が地域住民に浸透していることが重要。または安城市の事例のように、各防災倉庫に開設の手順を 10 項目にまとめた指示書を置いて、誰でも避難所の開設が出来るように準備して、掲示・設置することもできるのでは。

質問⑤：過去の被災地の事例を災害時避難所になる学校の先生や行政職員へ提供して連携する必要があると思っている。

→学校管理者と行政職員はもちろん、地域の代表も入れた 3 者合同の避難所開設・運営の話し合いを積み重ねていく必要がある。

質問⑥：RSY は現場に入り、アドバイスをした際、現地でスムーズに受け入れてもらえているのか。

→地域にもよるが現地からは大体「誰この人たち？」から始まる。行政と話をし、行政からの紹介で現場に入る場合が多い。その場にいる住民と信頼関係を築いて現場に入らせてもらう場合もある。あくまでもよそ者だという意識をもって入る。

質問⑦：地域の災害ボランティアや自治会などのユニフォームはどんなものがある？

→RSY は青のロゴ入り Tシャツがある。岡田が所属する名古屋市緑区の災害ボランティア連絡会でもビブスがあり、ポケットを付けるなど工夫をしている。

6. 閉会挨拶・修了証の授与

平成 30 年度 高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業 防災リーダー養成講座・フォローアップ編

- 日時：8月19日（日）13:30～15:30
- 場所：高浜エコハウス
- 講師：NPO 法人レスキューストックヤード
専門職アドバイザー 鈴木啓之
- 講義：

私は、一級建築士として、一般住宅や、店舗等を手掛けている。

阪神淡路大震災が起きた時、震度7という地震に、プロが設計した建物が耐えることが出来たか。それを検証するために、野宿をしながら、神戸の街を見て回った。室内は家具が凶器になっていた。

平成23年3月11日の東日本大震災では、津波があまりにも大きく取り上げられたことで、家具の転倒防止があまり取り上げられていない。確かに建物は東日本大震災の被害は非常に少なかった。どう違うかという、海洋性の地震は直下型の地震と比べ揺れの周期が非常にゆっくりだった。木造2階建などの低い建物には大きな影響はなかったが、4階5階の高い建物には、家具等が上の方の階では非常に倒れやすいという現象が起きた。

平成26年11月22日に長野県北部で地震が発生した。格子が斜めに倒れた家が非常に多かったが生存空間があった。ただし、たまたま人間が生き延びる空間ができたということ。寒い地方で、窓が小さく、それと使っている材木の質が良かったというこ

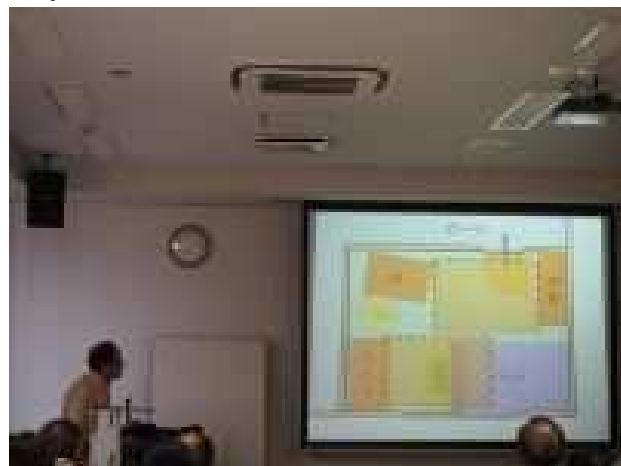


とだ。

そして照明器具。自分の寝室の上に照明器具がある人、実は危険だ。中でもペンダントタイプ。大きく振れて天井に当って、落ちてくる。

平成28年4月16日の熊本地震の特徴は、局部的にすごいエネルギーが加わったことだ。

このように倒れている何千棟もの建物を見て回ったが、圧倒的に倒れる方向は南面、東面の方が多い。なぜかという、窓があつて弱いため、建物が斜めに倒れる傾向が強いからだ。



洋室のトイレだと閉じ込められる可能性はあるが、四隅に柱のある空間であることは確かだ。それから浴槽だけは形を残しているのも多くの現場で見ている。

それから、建築屋として瓦屋を守る言い方をするわけではないが、瓦というのは基本的に落ちる物だ。地震が起きた時に、瓦は落ちて身軽になって本体を守る構造の物である。だから、瓦は落ちてても後でもう一回載せ替える、というのが日本建築の文化だ。

ビニールシート、これは発災直後に即、売り切れるので、備蓄してほしい。ただし、屋根をカバーするためではなく、雨に濡れて困る家財道具を一つにまとめて部屋の中

で守るために必要だ。そして、プロが来た時に初めて、ビニールシートを屋根にかけてもらう。

畳は濡らすとダメになるので、みんな起こしてその畳にビニールシートをかけてほしい。

危険な家財道具の代表格としては、冷蔵庫である。キャスターがついているので、隣の部屋まで動いてく。冷蔵庫が地震の揺れで台所から隣のリビングまで一人に動いて行ってそこで倒れる。

次は大阪府北部地震のブロック塀の話をする。

問題は法律が施工されたのが 1981 年という事だ。それより前に作られたブロック塀は建築基準法違反では、既存不適格。つまり作った後に法律が変わった。その場合は、あくまでもお願いして頭を下げて安全な通路にしてもらう必要がある。「あんたのどこ建築基準法違反だから、早く直せ」と頭



ごなしに言えないのが、法律の限界である。

高浜市では、小中学校すべて耐震化 100%だそうなので、校舎が崩壊して下敷きになって潰れて死亡するという事は、ほぼない。むしろ、避難訓練で、「地震だ！」の声かけで、ピアノの足にみんな子どもが掴まるのを見て、無茶苦茶な防災訓練をやっていたりしないだろうか。盲点というか、グランドピアノは危険だと認識してほしい。

一般に「防災のことやってますか」ときくと、やっているという返事がかえってくるが、何やっているかきくと、スリッパ、

飲料水、食料、ラジオ用意していますと回答がある。じゃあ「家具固定していますか」

「建物耐震していますか」ときくと、していませんという。それは防災ではなく、事後対策。防災というのは自分が生き延びる為、怪我をしないというのが基本だ。

防災というのは自分のためにやるものではない。どうせ死ぬからいいや、もし地震がきても運が悪かったと思ってあきらめるからいいやという方がいるが、そうではなくて、防災は自分の家族のためにやるものである。みなさん自分の子どもさん、お孫さんの顔を思い出してほしい。その子が自分の家の家具で怪我をしたと想像し、防災は誰のためにやるかももう一度考えていただきたい。

次に、部屋の設計についてだが、平成になって対面キッチンというものが非常に多くなっている。食堂と台所をわけたキッチンというのはとても危険。火を使う、刃物

を使う、物が落ちてくる、冷蔵庫がある、食器棚もひっくりかえる、とてもそこにいられるような空間ではない。

リビングでは、本箱ひっくり返る、タンスひっくり返る、机が動くという状況で、家具が倒れて、閉じ込め状態、脱出できない。

みなさん背の高い家具は危険だと認識する。それに対して高さ 1m くらいのものはこんな大丈夫だと思っている人が多い。子どもの身長を考えて、今一度危険度を確認してほしい。

ところで、電子レンジ固定してあるという人手を挙げてください。0人ですか。これも盲点だ。電子レンジの固定も必要だ。人間というのは地震が来た瞬間金縛りにあって動けない。でもいろんな人の話をきくと2~3mは這って動けるようだ。そのときにどこが危険か考えている余裕はない。ここに家具があるからここは危ないというのをとっさに思わないといけない。たとえばお孫さんと一緒に部屋にいたとして、お孫さんがいまどこにいるのかさがして、その前にタンスがあったら、真っ先にその子に、家具があるから危ないではなく、こっちおいでと言わないといけない。それを地震の起きる前、日頃イメージして、家具転倒防止に取り組んでほしい。

(神谷副市長挨拶)

こんにちは。防災リーダー養成講座に多くの方に参加頂き感謝申し上げます。私も先生の講義を10年位前に聞いた。お話を聞いてから今住んでいるところの実家と在所の寝室のところをすべてやった。非常に有意義な研修なので、これからの実技も含めて聞いていただければ幸いです。今後ともみなさんが防災リーダーとしてご活躍されることを期待し挨拶とします。



(休憩後、実演)

プロの家具の転倒防止は震度7に耐えられる方法だ。私は、震度6弱に耐えられる家具の転倒防止を目指せばいいじゃないか

と思っている。

なぜ、自分でできる必要があるのかといえば、こんな経験をするのがままあるからだ。家具転倒防止の依頼を受けていたのに、前日の夕方電話がかかってきて「すいません。部屋の片づけが間に合わなかったの、また今度にしてください。」と断られる。そのように、なかなか他人は、寝室とか入れられない。というわけで、講習会に出て、自分でできるようになることのメリットは、じつはこういう背景がある。

L字金具の話に移るが、下地の位置がわからん、3つあってもせいぜい一個しかビスが打てないということになる。冷蔵庫の固定でいっても、グリップを使ってもらうのがいい。このグリップに後ろ側にホームセンターにある棚につけるこのような金具を買ってきて下地を探してベルトでとめておく。電子レンジはこのようなベルトでぐるぐるとして固定する。L字金具で固定しても、床が滑るフォローをしなくてはいけない。重たい家具なら、根もとを少しとめておく。そうすると踏ん張れる。L字金具は薄いぺらぺらがいい。なぜか。薄いL字金具だとふにゃふにゃと免震になる。厚いL字金具だとがっちり固定されてしまってビスに遊びがなくなる。家具の転倒防止の限界はこのL字金具がちぎれるなんてこと

はありえない。ビスが抜けるのが家具の転倒の原因だ。ということは、L字金具は柔らかいほうが力が逃げやすい。床につけるときは厚いL字金具のほうが丈夫だ。

それからチェーンで後ろから引っ張る方法の場合は、隙間を空けないでほしい。ぴったりつける。このチェーン60キロに耐えられると書いてあるが、引っぱり試験の結果100キロに耐えられる。一番いいのは斜め30度に下向きにつける方法だ。大工さんのやる失敗は八の字につける。八の字につけると丈夫に見えるがプロの家具の転倒防止は家具は動いていい。床の摩擦でエネルギーが逃げていって、そのほうがいい。ハの字につけると200キロの家具は通常なら2本の腕で100キロずつになるはず。これ45度にふったらルート2になって141キロで引っ張られることになる。それから一番多いのが上下の連結をしない。被災地でよく見かけるのは、せっかくL字金具をつけているのに、下からすぼんと抜けて上がブランブランになっているのが結構多い。だから上下の連結は必ずやらなければいけない。

吸着マットは、21世紀に生まれた家具の転倒防止グッズの優れもの。ただし、付け方が大事。まずほこりまみれのところにつけてはいけない。濡れ雑巾で綺麗にふいて、そのうえでアルコールウェットティッシュ、エタノールで綺麗にふいて揮発させて乾いてから、吸着マットをつけてほしい。そうすると非常によくつく。人間の手の油がついているところには付きが悪い。吸着マットの素晴らしいのは、洗って干す事でまた使える。最初の能力が100とすると、2回目は70、そのあとは、何回やっても永遠に70。何で100に戻らないかという洗っても完全に油はとれないから。ただ、瞬間的には強いが、震度3~4くらいでも長い時間かけるととれてしまう。それから、壁には着かない。あくまでも上から

荷重で押さえつけているもののみ効く。

このように、家具止めの道具を特性を活かして使用することで、素人でもできる防災対策に、今日からすぐに、取り掛かってほしい。

以上



外国人向け防災・減災イベント

「ジシン・カサイ・ゴキンジョってなあに？」

- 日時：平成 31 年 3 月 9 日（土）
13:30～16:00
- 場所：葎池住宅集会所
（高浜市湯山町 4 丁目）
- 参加：約 55 名

高浜市には、3,000 人を超える外国人が在住している。市町村人口に対する外国人住民の割合は愛知県内で上位に入っていることから、在住する外国人に対して、災害について具体的な安全対策を各家庭や地域で取り組めるよう啓発する防災・減災イベントを開催した。過去 2 年間は、主にブラジル人コミュニティに絞って集客等していたが、今回の会場（葎池住宅）の住民の中には、ベトナム人、中国人、フィリピン人など多国籍に渡るため、前年までに作成したガイドブックのポルトガル語版のほかに、ベトナム語版とやさしいニホンゴ版を新たに作成し、合わせて、ポルトガル語版の改定も行った。

事前告知として、市の広報紙で案内すると同時に、チラシも自治会単位で回覧・配布した。会場の葎池住宅内の掲示板にも掲示した。

当日、団地内でスピーカーを用いて、行事案内をしたところ、聞きつけて参加した人が多くみられた。

- 高浜市の地震災害の特徴や緊急時の対応について知る防災学習
「地震ガイドブック」
ポルトガル語／日本語版
ベトナム語／日本語版
ヤサシイニホンゴ／日本語版の配布と解説



最初に吉浜高浜市長から挨拶があり、続いて RSY 浜田が阪神・淡路大震災の地震や東日本大震災の津波の動画、液状化の写真などを使い、災害時に実際どのような状況になるかを説明した。「地震ガイドブック」を使って、南海トラフ巨大地震が発生した際の高浜市での「揺れ」「津波」「液状化」「火災」の被害予測やその対策方法について解説した。



ガイドブックには、災害時に使う可能性が高く、覚えておいてもらいたい単語についても日本語と他言語で併記しており、日本人と外国人がお互いに助け合える関係づくりが大切であると伝えた。

参加者は、日本人が 3 分の 2 程度、ブラジル人、ベトナム人、中国人などが参加し、それぞれ、一番読みやすいガイドブックを取って、話を聞いていた。



続いて、高浜市と碧南市を管轄している碧南警察から、市民 1,000 人に対して警察官が 1 人しかおらず、災害時の警察官の救助活動には限界があるとの説明があった。そのため、

まずは自助が大切であること、地震に備えて家具固定や、非常食を準備しておくことなどが大切であるとの話があった。

最後に、日本で非常食として市販されている「アルファ化米」と「アルファ化 Pasta」の作り方を説明し、実際にお湯を注いで食べられるところまで、体験してもらった。

さらに市販されている「長期保存パン」「ビスケット」などを紹介し、ブラジルのお菓子を比較的賞味期限の長いものを示して、食料の備蓄についても説明した。



□地震の揺れを体験する「こなまず号」試乗

机サイズの起震装置「こなまず号」を使って地震の揺れを体験するコーナーは、子どもたちに人気だった。初めて揺れを体験したという外国人参加者もいた。地震の際にどのような態勢をとれば安全であるかも考えながら体験してもらうことで、いざという時の行動がイメージできた。また、地震があった時に、家具固定をしている部屋としていない部屋の状況を比較できる模型（ぐらぐる模型）をこなまず号の上にセットし、家具固定の大切さも説明した。



□消火器の取り扱いを学ぶ「水消火器」体験

市職員および地域ボランティアの指導により、適切に消火器の操作を学ぶことができた。初めて消火器に触れるお子さんにもわかりやすい説明で、何回も挑戦することで、スムーズに使えるようになっていた。実際には、消火器がすぐに手に入る場所になければ、消火活動ができないことから、自宅でも消火器を常備すること、集合住宅等のどこに配置されているかを知ることなどが大切である。



□煙の中での行動を学ぶ「煙中」体験

火災が起こった際に、煙の中では想像以上に視界が奪われ、まったく前が見えなくなることを体験し、どのように行動すればいいかを訓練した。実際の現場では、停電で真っ暗だったり、障害物があるなどの危険が潜んでいることも学び、ヘッドライトなどの明かりがあるとよいなど、備えの大切さについても適宜説明した。



□助けを求めるための「大声コンテスト」

災害時に助けを求める訓練として、騒音測定機に向かってあえて日本語で「たすけて！」と叫んでもらい、声の大きさを測定した。誰が一番大きな声のでるかなど、楽しみながら参加してもらった後、実際には大声を出し続けるのは難しく、笛などがあると役に立つことを説明した。参加者全員に防犯笛をプレゼントし、常備してもらうように伝えた。



参加者の声：

- ・小さい子どもがいるので、災害時にどのように動いたらいいかを知りたくて参加した。
- ・ベトナム語版があつて、よかった。妻も子どもいるので、持ち帰って話題にしたい。
- ・（こなまず号を何度も体験したあと）最初は、こわかったけど、丸くなるポーズをとると、あまり怖くないことが、わかったよ（ブラジル人小学生）。



平成 30 年度高浜市「防災ネットきずこう会」支援事業 福祉避難所編 報告書

■日時：12月16日（日）13：30～16：00

■場所：吉浜公民館および吉浜小学校体育館

■参加者数：41名

■実施内容

1) 講演「被災するということ」／レスキューストックヤード・常務理事 浦野愛

今年度は地震と水害が多発し、多くの被災者が今も避難生活を送っている。南海トラフ巨大地震発生時は、高浜市も大きな被害を受ける可能性が高い。過去の被災体験から、備えるべきことを学び、この施設が福祉避難所として機能するために必要な機能や要素を皆さんと共に考えたい。

阪神・淡路大震災では地震による直接死約5,500人のうち、83.7%が家屋の倒壊・転倒等による圧死・窒息死であったとされている。この結果は、大きな揺れから命を守るための最優先課題は居住環境の安全性を高めることであると言える。特に災害時にひとりや家族で身の安全を確保することが難しい障がい者世帯等は、しっかりと取り組む必要がある。実際、東日本大震災で12.1mの津波被害を受けた宮城県七ヶ浜町の肢体不自由者は、事前に耐震補強、家具転倒防止を実施していたことで、高台への避難に成功した。このことから、居住環境の安全対策は、命を守り、避難行動を早めることに効果的であることが実証された。しかしこれを行うには、本人や家族の自覚と、周囲からの協力が不可欠である。

また、阪神・淡路大震災では、支援を求めている3万5千人のうち、77%は地域住民が助けた。ある支援者からは「一番好きな人から助けた」というコメントもあり、地域で良好な関係を作り、自分たちの存在を記憶してもらえるような働きかけをしておくことが、周囲から支援を受けるために大きなポイントになることを学んだ。このような結果は、9月に発生した北海道胆振東部地震で

も同様に見られた。町内会が障がい者への発電機の貸し出しや、高齢者等の避難誘導のために動いた事例や、マンションに住んでいた要配慮者のために高校生が水汲みを手伝ってくれたという事例もある。また、障がい当事者の情報を日頃から把握している「札幌市障害者基幹相談支援センター」が、安否確認や個別支援にあたった事例もあり、様々な社会資源とのパイプが実際の救助に大きな力を発揮したことが分かる。

一方、指定避難所の生活は過酷であった。階段や段差、和式トイレ、間仕切りなどプライバシーの無い空間が、移動やオムツ交換等の支障となった。障がい者世帯は「とても生活できない」ということで、車中泊や避難所外避難、在宅避難を選ばざるを得ない状況があった。しかし、地域の協力が得られた避難所には、「福祉避難スペース」が設置されたり、空調や電源の配慮を受けることができたりして、長期間滞在できた方もいた。普段障がいのある方と接点のない地域の人々は、何をどう配慮すればよいのか分からず戸惑っているという状況もある。やることさえはっきりすれば、快く配慮してくれる人もいると考え、当事者側が率先して、日ごろからそのための具体的な対応策を伝えることが重要だ。

名古屋市のある地域では、地域・行政・当事者団体・NPOが連携して、避難所開設訓練を実施した。このようなプログラムが高浜市でも展開できるとよいのではないかなと思う。

2) 避難所・防災倉庫見学

指定避難所である吉浜小学校体育館、および防災倉庫を見学。体育館に実際に横になるなどして、生活のしづらさをイメージして頂いた。また、施設の設備および防災倉庫の中身を見学頂き、内容・数を確認。人任せでなく、自分で用意すべき

もの、環境整備のために活用できそうな道具を確認した。

3) 演習「福祉避難スペース」を設置してみよう!

下記の3つの内容に分けて体験型のワークショップを実施。避難所生活で改善が必要な優先課題であるトイレ・寝床の整備方法を理解し、RSYが協働開発した避難所便利グッズ「HUG×KUM」を紹介。使い勝手の確認と品質改良のためのヒアリングをさせて頂いた。

(ワークショップメニューと内容)

①断水時のトイレの対応、手洗い環境の整え方 (10分)

仮設トイレを用いて、断水時の汚物処理の方法を学んで頂いた。また、衛生環境を改善するための手洗い場の整え方も体験した。

②段ボールベッドの作り方・パーティション、寒さ対策の方法 (20分)

ペットボトルの空き箱や、プチプチシートなど身近にあるものを利用し、手作りの段ボールベッドを作成。また、既製品の段ボールベッドの組み立ても体験し、寝心地や効果、優先して使うべき方の確認を行った。

③スズキモダン避難所支援キット「HUG×KUM」実

演 (15分)

折り畳み椅子を車椅子や台車替わりに使う、布担架など、キットを活用した環境整備について意見を頂いた。住民の方々からは概ね好評を頂き、「使いやすい」「デザインがいい」などの意見が上がった。

4. まとめ

今回は、障がい者と家族が参加し、避難所の実態を理解して頂くと共に、改善するために必要な要素を一緒に考えることができた。皆さん非常に

熱心に参加頂けて、貴重な機会となった。ここで提案されたことをぜひ一般の避難所で適応できるよう、今後も継続的な議論を重ねて頂ければと思う。